

## 人たちの生活を支えているものを垣間見る

杉田 真衣（首都大学東京）

### 1. はじめに

現代社会においてポピュラーなものとは何であり、それに根ざした「知性」とは何であるのかを探るのが、本報告に与えられた課題である。報告者はこれまで、高卒の若い女性たちを対象としたインタビュー調査や、野宿者たちに対する支援活動を行ってきた。こうした相対的には社会の周縁に置かれた人たちと関わっている経験から、なにがしかの知見を示すことが求められている。しかし私には、彼女ら彼らとの関わりを通して見えてきた「知性」を自信をもって示すことはできない。それは、そもそも彼女ら彼らがどのような思いで暮らしているのか、彼女ら彼らから社会がどのように見えているのかについて、十分に理解できているとは思えないからだ。そのような私が彼女ら彼らの言動の中に「知性」を見出すというのは、おこがましい気がする。そのことを前提にしつつ、彼女ら彼らが生きる世界に触れさせてもらえたように思えた場面を紹介していきたい。

### 2. 真空のような空間に置かれた経験

金沢で、野宿生活をする方たちに差し入れをしたりする夜回り活動を行ってきた。活動の中心にいるのは、あと数ヶ月で70歳になる坂優さんだ。元々野宿をしていた坂さんは、2008年の冬に一人で夜回りを始めた岡山峰子さんから生活保護の申請を勧められたことをきっかけに、図書館で生活保護について調べ始めた。毎日通って関連する本を片っ端から読んでいき、分かったことを大学ノートに書き留めていって、制度について理解したうえで生活保護の申請に臨んだものの、受理されなかった。岡山さんに紹介された人の同行のもとで申請を通すことができると、岡山さんと協力して夜回り活動をする事となった。私が活動に加わったのはその1年くらい後になる。<sup>i</sup>

坂さんは、私たちとの夜回りだけでなく、毎日一人であちらこちらに出かけ、元野宿者や現野宿者を支えている。野宿に至った理由は病気による失業で、いまでも身体が思うように動かなくてつらそうにしているが、それでも活動を休もうとはしない。そんな坂さんの姿を新聞やテレビで目にした人たちは心を動かされ、「仙人のようだ」などと評する。坂さんはよく私に対して「このあと二人だけでどこか行く？」といった性的なニュアンスを含む冗談を言い、「はいはい」と受け流すと「えへへ」と笑って、私も「ははは」と笑うというのが挨拶のようになっている。いかに事情通であるか、会の他のメンバーとよく張り合ったりもするので、メディアが坂さんの物語を美しく記述するたびに、「どうも違う」と違和感を覚えてきた。

しかし、かくいう私も坂さんのことをさほど知っているわけではないのだと思い知らされたことがある。坂さんに年1回、大学の授業でご自分のことを話してもらってきたのだが、来歴を話すなかで必ずと言っていいほど言葉に詰まり、涙するときがある。生活保護申請が通ってアパートに入居した直後のことについて話すときだ。アパートの部屋で一人になると、「頭が真っ白」になったという。何をどうし

たらよいか全くわからなくなった坂さんの足は、自分が仲間たちとともに野宿をしていた場所へと向いていた。以後、仲間を支える活動へと没頭していく。坂さんが泣くのはこの話をするときしか目にしたことがなく、坂さんの涙を初めて見たとき、彼を根本のところまで突き動かしているのがアパートでのこの経験なのだと思った気がした。

### 3. そばにいる人の怒りをともにする

2003年春に都内の二つの高校を卒業した方たちのことを、高卒5年目までは東京都立大学／首都大学東京の調査グループで（乾編 2013）、その後は単独で追跡し（杉田 2015）、インタビューを行ってきた<sup>ii</sup>。調査協力者のうち、庄山真紀さん（仮名）は、高校を出てから一貫して非正規で働いている。庄山さんは自分のことを「人見知り」だと言うが、彼女の話には、同じ職場でパートで働く女性たちとの関係を築いていることがうかがえるエピソードが時々出てくる。たとえば、卒業後3年ほど働いていた弁当屋で、その店の正社員による理不尽な指示への怒りが抑えきれなくなって、仕事時間中に自宅に帰り、そのまま2週間ほど出勤できなかったことがあった。パートの女性たちが「大丈夫だから来な」と連絡をしてきてくれて復帰することができ、最終的には正社員二人と話し合うことになった。その話し合いで庄山さんは「パートさんに負担かけないでくれ」と言い、正社員のするような仕事をパート社員に押しつけるのはやめてほしいと訴えた（2006年4月22日インタビューより）。

高卒10年目に入る頃には、庄山さんはそのとき家賃を折半して一緒に暮らしていた男性との交際を終わらせるということがあった。彼が別の女性とのメールのやりとりにおいて、庄山さんのことを「居候」と呼んでいるのを目にしたからだ。庄山さんは高校のときからの友人である西澤菜穂子さん（仮名）にすぐに電話をして協力を要請し、数日ののちに別のアパートへと引っ越した。引越しの最中には気づかなかったが、西澤さんは元いた部屋の浴室にかつらを持ち込んでその髪を切り落とし、「(その上に) ケチャップかけてきてやった」と話していたそうだ。庄山さんの代わりに仕返しをしたというわけだ（2013年3月30日インタビューより）。

### 4. 日々行われる贈答

庄山さんの家族はホステスの仕事をする母親一人で、高卒4年目に母親が病死すると、家賃が払えなくなったため二人で暮らしていたアパートを引き払った。台所の流しの下のパイプがネズミに囓られ、そこから漏れた水によって床に大きな穴が開くなど、部屋の状態は「相当酷かった」ので、多額の修理代がかかる見込みだった。しかし、敷金は戻らないものの、大家が事情を考慮してくれて、追加の修理代金は請求されなかった。大家の50代くらいだという娘は庄山さんに手紙をくれて、返事をしたら今度は食料を送ってくれたという。

「もらってばかりだと悪いんで、いちおうお歳暮とか、そういう形でお返ししたら、たぶんまたあっちも気を遣ったんでしょね、また来るから、こっちも気を遣うわけじゃないですか。返して、こう（互いに）返して返して返してみたいな。」（2008年2月26日）

このようにして、しばらく物を贈り合う関係が続いたという。庄山さんは私にも、インタビューのために会うとプレゼントをしてくれたり、手紙にプレゼントを同封して送ってくれたりする。先述の西澤

さんもまた、インタビューの時に「バレンタインが近いんで」とか「いつもお世話になっているから」などと言って（世話になっているのはこちらの方なのだが）、きれいに包装されたお菓子を渡してくれる。

## 5. 生活の中の係留点

高卒の若い女性たちも、元・現ホームレスの方たちも、日々の生活をつくっていくことそれ自体が難しい状況に置かれている。しかし、彼女ら彼らは、生活することの難しさに翻弄されている日常のなかに、あるいは傍目からは上手い具合に立ち回っているように見える日常の奥に、他の人たちとともに在り、自分自身を見失わないための係留点のような経験や、それを生み出す技法を持っている。そこから彼女ら彼らの世界が立ち上がっているように見える。そのような係留点はどのような性格をもっているのか、そして、そもそも私たちはそうした係留点をどのように知ることができるのか。

## 6. 人たちがいるなかで暮らす

坂さんがアパートに入ったときの話を振り返ると、思い起こされる別のエピソードが二つある。

一つは、インタビュー調査の対象者である浜野美帆さん（仮名）が「葬儀屋」で働いたときのことだ。倉庫で看板を作ったりする仕事で、自分以外誰もいない倉庫で作業をしなくてはならず、一日で辞めた。「あんまりにもシンとして」静まりかえっているのが苦痛だったという。

「倉庫の中で一人でやるのは、自分との戦いだな、と。(略) なんか離れになってるんですよ、倉庫が。仕事してるならちょっとザワザワしてる方がいいんですよ。あんまりにもシンとしてると。派遣でも、倉庫とか行くじゃないですか。大人数ですらシーンとしてるじゃないですか。(略) 刑務所のなかみたいなかんじじゃないですか。それが嫌なんですよ。」(2006年3月8日)

その後就いたチャットレディの仕事は各々パソコンに向かってする仕事で、お菓子を食べたりと割合自由に過ごすことができ、静かではあっても倉庫で仕事をするときは「また違ったシーンとした感じ」で働きやすかった。浜野さんは高校卒業後に美容室に就職したものの、過度に干渉されたのが一因で一年半ほどで辞め、それからはアルバイトや派遣の仕事をいくつも経験していった。そのなかでチャットレディの仕事へと至ったのだったが、暴力的な干渉もなく、一人にさせられるのでもない仕事を選んでいったのは、少しでも安心して働けるための知恵を獲得していく過程だったと言える。

二つ目は、一緒に夜回りをしている野村進さんが言うことだ。アルコール依存症で入退院を繰り返したあと30年以上お酒を止めていて、断酒会の活動をしている野村さんは、「酒は一人では絶対に止められない」と繰り返し言い、週1回仲間と集まる例会があるからこそ断酒を続けていくことができたという意味を込めて「断酒させていただいている」という言い方をする。例会は「体験談に始まって体験談に終わる」が、不公平感を抱かなくて済むように一人の持ち時間がきっちりと決められていて、それは参加者たちが対等な関係でいられるためである。そうした関係が維持されないと例会が成り立たないのだという。仲間といないと断酒は叶わず、仲間とともにいるためには水平の関係を維持しなくてはいけないというのが、野村さんたちが生きていくための知恵であり技法である。

浜野さんも野村さんも、たった一人だと感じさせられては働き暮らしていくのが難しいと知って、そうはならないようにする術を身につけていったが、さらに野村さんは自分が体得した知恵や技法を仲間

もまた獲得していくのを支えている。野村さんは、例会には自分で参加することが大切だという理由で、参加者を迎えに行くことはしないが（自分から来ればお酒を飲んでいても迎え入れる）、帰りは車で仲間たちを送るのだそうだ。坂さんが、自分がいなくても孤立することがないようにと、アパートに閉じ籠もりがちな人たちに会いに行き、外に誘い出して他の人たちと会うきっかけをつくっているのも、似た振る舞いだと言えるかも知れない。

## 7. 同じことを一緒にする

ここで夜回り活動のなかでどのようにして路上で暮らす方（坂さんは「現役」と呼ぶ）と関わってきたのかに触れたい。いまは会うと笑顔を見せ、ほがらかに話してくださる本田さん（仮名）は、最初は話しかけても険しい表情をして、無言のままだった。何度も会いに行くなかでじきに話してくれるようになっていき、いつしか、私たちが行く前に準備をしてくれていたかのように、会わなかった間に何があったかをコンパクトに報告してくださるようになった。その後、80歳近いのに野宿を続けていた方が目に見えて体を弱らせていき、認知症からか排泄物で周囲を汚すようにもなったことがあった。いくら説得しても病院に行くことに同意してくださらなくて、どうしたらいいのか夜回りで議論になった。「現役」の方たちと私たちとが自然と円になって、ああでもないこうでもないと意見を出し合いながら真剣に話し込み、ふとそんな自分たちの絵を俯瞰して「こんなことこれまでなかった」、「現役」の方たちとの間の境界線が変化したと感じた。本田さんは、新たに野宿を始めた方がいると私たちの会のチラシを渡して説明し、私たちに引き合わせてくれるようになった。

しばらくして、坂さんにアパート訪問などを任せきりなのは酷だし申し訳ないが、仕事をしながらアパートを訪問するのは難しいのでどうしたらよいかと思案し、長く刑務所にいた森本さん（仮名）の助言で、まずは年賀状・暑中見舞いを送り始め、その後アパートにいる方も「現役」の方も誘ってバーベキューや鍋をするようになった。初めてバーベキューをしたとき、「現役」の方たちがてきぱきと準備をして、野菜や肉をどんどん焼き、夜回りの際にはただ一方的に差し入れをする私に対して「食べなさい、食べなさい」とすすめてきた。そして、誰が「現役」で「元現役」で「支援者」なのかわからない集合写真を撮って終わった。そのあと夜回りで「現役」の方たちに会うと、それまでには見たことがないほどやわらかくおだやかな笑顔で「この間は楽しかった」と言われ、関係が根本のところが変わったように感じた。

## 8. レギュラーなものをつくる

では、坂さんや野村さんとの関係はどうか。坂さんは私に対し「センセーはどうせそのうち離れていくだろう」と思っていたそうだが、私が基本的に夜回りを休まなかったため、次第に信頼してくれるようになっていったようだ。坂さんも野村さんも、夜回りをほとんど休まない。野村さんはよく、「自分などが夜回りにいても役に立たないから申し訳なく思うが、こういう活動は一度さぼってしまったらその後もさぼり続けてしまうから休まず通っているのだ」と私に言う。そして必ず、「断酒会の例会も同じ」と付け加える。野村さんが言うには例会は週に一回くらいのペースで行われることが必要であり、事情で参加できないときには、「キリスト教と仏教のように違う」という別の団体の例会に飛び入りで参加するという。

活動を休まないこと、定期的に会うこと、レギュラーであるということは、坂さん・野村さんの信頼

の判断基準であるだけでなく、野宿の「現役」の方たちとの関係の土台にもなっている。会い続けているうちに、隣人であることがごく当たり前になっていく。そうすると、彼らも親しげに接してくれるようになる。森田さんは、アパートに入った方たちへの葉書の送付やバーベキュー・鍋は、支援者側の都合に左右されることなく定期的に行う必要があると強調した。元「現役」の方たちは「そろそろだな」などと思えて、彼らと私たちとの距離が近づくのだと説明していた。

庄山さんや西澤さんによる律儀な贈答も、彼女たちが人との間に信頼関係を築いていくためにつくり、守ろうとしている規則のようなものに見える。そして、そうしたふるまいを互いに続けられるか否かで、私が関わってもよい人間であるか判断しているのかもしれない。

流動化、不安定化し、個々人が分断され孤立させられた社会を生きていくために肝要なこととして、承認が論じられる。夜回りの活動は野宿者をいなくにする社会への抵抗、女性たちへの聞き書きは「聞き取られ難い声」を記述する試みであると言え、いずれも社会の周縁に置かれた人たちの承認へとつながる活動だと見なせるかもしれない。私が彼女ら彼らに口頭や手紙や贈り物で表現する謝意などは、彼女ら彼らに承認された感覚をもたらすことも考えられる。断酒会の例会にしても、同じ立場にある人たちが互いに承認しあえる場であると言える。ただ、夜回りやインタビューをするなかで見てきたのは、彼女ら彼らが律儀に続けている、淡々としているとも言えるような、日々に恒常性を生み出す営みである。もちろん、レギュラーであることから排除されてしまう人たちはいて、そのことは決して看過できない。また、そうした営みがただちに社会変革へとつながるわけでもないだろう。とはいえ、不安定な社会をより生きやすい社会へとつくりかえていく技法として着目してみてもよいのではないだろうか。

---

i 「かなざわ夜回りの会」と名乗って活動している（旧称「石川ホームレス自立支援ネットワーク」）。活動は主に、①夜回り、②生活保護申請への同行、③アフターフォローの三つである。夜回りは、毎月第2・第4金曜日の夜9時頃から、金沢市の武蔵エリアで行っている。食べ物や飲み物を差し入れし、安否確認を行い、生活相談を行う。食料品以外にも、必要に応じて、石鹸・洗剤、下着・洋服、靴、毛布・寝袋などをお渡しする。夜回りでお会いする方には、生活保護の受給を望まずに野宿を続けている方、年金を10数万円受給しているため生活保護を受けられない方、生活保護の申請を希望して支援を求めている方などがいる。これまでお会いしてきた方たちのほとんどが男性である。生活保護の受給を望まない理由としては、①自活すべきだという規範が強く「人様が払った税金の世話にはならない」と考えている、②かつて働いたときに直面した困難から、福祉事務所から就労を求められることに強い拒否感をもっている、③身元を明かしたくない、といったことがある。こうした方たちの場合、差し入れをしておしゃべりをしながら近況をうかがい、何かあったときに頼られる関係でいられるように努める。

生活保護の申請を希望することが確認された場合は、アパート探しと生活保護申請に同行する。申請の際には、不動産屋でアパートを見つけて見積書を出していただく→見積書を持参して福祉事務所に行き面談する→申請が受理されたら不動産屋でアパートの鍵を受け取る→アパートでケースワーカーによる居宅確認→福祉事務所に戻って「生活つなぎ資金」の貸付を申請→社会福祉協議会まで行って「生活つなぎ資金」を受け取る、という流れができています。

アフターフォローとしては、アパート入居後に訪問し、「順調に」生活できているか確認し、困りごとがあれば相談に乗る。生活保護を申請してから、保護が決定して保護費を受け取るまで、だいたい1ヶ

---

月の間は「生活つなぎ資金」3万円で生活しなくてはならない。自炊するための調理器具などがないなかで生活するのは厳しいため、この期間には必ず訪問するようにしている。また、使わなくなった冷蔵庫、洗濯機、テレビなどの電気機器、あるいは家具や衣服などの寄付を募って配布することもある。

ii 入試難易度でいえば「中位校」のA高校と「最低位校」のB高校を卒業した若者たちを対象として、高校3年在学時（89人）、高卒1年目（53人）、高卒3年目（39人）、高卒5年目（33人）に行った。その後、B高校出身の4人の女性を対象として、高卒10年目と、30歳となる年である高卒12年目に単独でインタビューを行った（その後も継続中）。本報告に登場する女性たちは全て、高卒10年目以降もインタビューをしている方たちである。

#### 【文献】

乾彰夫編『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか—若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店、2013年。

杉田真衣『高卒女性の12年—不安定な労働、ゆるやかなつながり』大月書店、2015年。